

タイトル:平成 29(2017)年度 教育セミナー(第 13 回)

日時:2017 年 9 月 14 日(木)~17 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室(303)

「トルコ共和国の憲法改正について」

櫻井 幸男 (日本大学大学院研究生)

今年の春、証明書を貰うために訪れた母校の教務課事務室前の柱に貼ってあった「中東☆イスラーム教育・研究セミナー」のポスターを見つけ、ただちに教育セミナーに応募した。研究テーマを成年後見制度からトルコ現代政治に変えようと考えていた矢先だったので、研究テーマ転換のきっかけとなることを期待して、本セミナーに参加した。

セミナーは 4 日間だったが、あっという間に時間が経過し、長いとは感じなかった。印象深いことは、参加者が積極的に質疑応答に参加したことである。国内のセミナーで、このように活発な質疑応答が行われることは珍しく、参加者の意識の水準が高く、なおかつ本セミナーの企画・運営が参加者の期待に合致していたことの表れと理解された。普段は各地に分散する中東・イスラーム研究者を目指す院生が、東京外大 aa 研の教育セミナーの場で交流することは大いに意義があり、本企画をこれまで 13 回継続された東京外大 aa 研のリーダーシップに敬意を表する次第である。是非今後とも同セミナーを継続して頂きたい。

緑に囲まれた東京外大多磨キャンパスの中にある、aa 研の天井の高いゆったりした会議施設で気持ちよく過ごすことができたことも、セミナーを支える大切な要素であった。このようにあらゆる点で素晴らしいセミナーであるが、今後の企画の参考となるように、気づいた点を 2、3 述べることにしたい。第 1 に、外部講師の講演は、中東・イスラームの地理および学術領域のバランスを注意深く配慮したものであったが、講師の研究経験に軸足が置かれていたように感じられた。研究経験の話は大変興味深く示唆に富んでいるが、過去の話であることも事実である。若い院生は、未来に向かって今後研究をいかに進めるべきか、日々模索していると思われる。そこで、未来に向かって研究をいかに科学的に進めるのか、先学の師の専門的解説に触れることも意義ある事と思われる。たとえば、中東・イスラームに関する海外の図書館、博物館情報、現地の資料や文献へのアクセス、中東・イスラーム研究の海外拠点、最近の国際学会の関心事項、論文の科学性など学術研究の基礎に関する講演枠を設けては、いかがだろうか。第 2 に、人文科学と社会科学のバランスである。このバランスは、外部講師の選択の際に、1 つの要素として考慮されるとよいと思われる。第 3 に、院生全員に発表の機会を与えることは無理であろうが、院生の研究に関するレジュメをあらかじめ全員で共有しておけば、各位の研究の背景が明確になると思われる。

最後に、飯塚所長ほか aa 研のスタッフの皆様には、3 連休中の週末出勤を含め多大なるご支援をいただき感謝する次第である。いつの日か「研究」セミナーに参加して報告を行うことを、私の目標として掲げておきたい。